シュテファン・ヒューブナー著
高嶋航・冨田幸祐訳

『スポーツがつくったアジア』

――筋肉的キリスト教の世界的拡張と創造される近代アジア――

小木曽　航平

二〇一七年八月一九日、評者はマレーシアにいた。第二九回東南アジア競技大会（SEA Games）の開会式を観るためである。[1]首都クアラルンプールに建つブキット・ジャリル国立競技場は約八万人の観客と五千人を超える選手やチーム・スタッフで埋め尽くされた。大規模な国際スポーツ大会がこの国で開催されるのは久しぶりであった。繰り返される「我が祖国」の大合唱に会場の一体感はいや増し、マレーシアの歴史の歩みが壮大に演出されていく。初めて目にする東南アジア競技大会の予想を超える規模と盛り上がりに驚くと共に、来たる「二〇二〇年東京オリンピック・パラリンピック競技大会」[2]に向けて複雑な想いを馳せたことを記憶している。

近年、こうした「アジア」におけるスポーツとスポーツ大会に関する歴史研究は、国内外で増えてきているようだ。[3]とはいえ、著者自身が「日本語版序」に記す通り、アジアで行われた複数のスポーツ大会を取り上げて、二〇世紀のスポーツとアジアの近代化や開発の政策との関係を、その高い研究水準において解き明かそうとした試みとなれば、ほとんど本書が初めてではなかったか。そのような注目すべき本の翻訳がこんなにも早く出版されたことを素直に喜びたい。

さっそく本書（原題：*Pan-Asian Sports and the Emergence of Modern Asia, 1913-1974*, National University of Singapore Press, 2016）の内容を紹介しよう。「序章」にあるとおり、全体を通じて問われているのは、東洋（アジア）と西洋（とりわけアメリカ合衆国）の間の権力の非対称であり、それを鮮やかに映し出す西洋から東洋へのスポーツの伝播と受容である。その伝播と受容の具体的なプロセスがスポーツ大会の開催を事例に検討されていく。こうした二〇世紀前半におけるスポーツの世界規模での普及を正当化したのが「筋肉的キリスト教」の精神、つまりは「平等主義」、「国際主義」、「経済発展」であった。そして、この精神を近代化の要として、スポーツによってアジアの人々に伝えようとしたのがＹＭＣＡの宣教師やスポーツ専門家、また、彼らに同調するアジアの政治的エリートたちであった。彼らはスポーツによる文明化を自らの使命として、アジア地域で様々なスポーツ大会を開いていく。そうしたスポーツ大会の事例として、本書は「極東大会」、「西アジア大会」、「アジア大会」の三つを主に取り上げる。期間は一九一〇年代～七〇年代までの約六〇年間である。第一章と第二章で極東大会と西アジア大会を、第三章以降はそれぞれの章が一回分のアジア大会を扱う（第七章のみ二回分）。対象となる地域はフィリピン、中国、日本、インド、インドネシア、タイ、イランの七カ国に及ぶ。これほどの時間的地理的規模

で書かれたスポーツ史はそう多くはない。

本書の主な論点は、初期のアジア大会とその前身の大会がいかにしてネイションと近代アジア像の論争の場へと変わったのか、そしてそれはなぜかである。これらに答えていくことが結局のところ、二〇世紀のスポーツ大会に基づくネイションの観念と「アジア」の意味についての歴史を描くことになる。このようなスケールの大きさにも関わらず、本書がその分析の緻密さと整合性を保ち続けている理由に著者の明確な概念装置が挙げられる。即ち、「権威主義的高度近代主義」、「エスノ・シンボリズム」、そして「ネイションのブランド化」である。

「権威主義的高度近代主義」はジェームズ・C・スコットの用いた概念で、本書においてはアジアの政治的エリートたちがスポーツ大会の開催を通じて成し遂げようとした近代化と発展のその具体的な内容を説明するために導入される。他方、アンソニー・D・スミスの「エスノ・シンボリズム」という概念は、ナショナリズムと汎アジア主義の分析に役立てられている。とりわけ、主催者たちが大会をどう演出したのかを明らかにする。そして、最後の「ネイションのブランド化」は、経済的、軍事的権力を適用する代わりに、演劇によって増大する権力を示すことで国家や植民地の特定の表象を創出する意図的な試みとされる。このネイションのブランド化への欲望は、その初期のスポーツ大会においてはアジアの政治的エリートたちの「高度近代主義」を正当化し、また、一九五〇年代以降においては国際社会におけるアジアの覚醒をスポーツ大会の成功によって自他に印象づけることへと向かうことになる。このような三つの視点から描かれる個々のスポーツ大会の歴史を読めば、スポーツとそれによってもたらされる西洋的価値観がいつでも、どこでも、すんなりと受け入れられた訳ではないことがわかる。汎アジア主義や反植民地主義によって、スポーツとそれらを取り巻く制度はそれぞれの国にそれぞれのやり方で「奪用（appropriation）」されていく。しかも、そうした奪用のプロセスもまた、決して一様ではなく、多様なアジアそのものである。本書は西洋と東洋の間の非対称という明快な図式を維持しながらも、スポーツの国際大会がアジア諸国で開かれる際の個別性を浮き彫りにしていく。以下、章ごとの具体的な内容に移っていこう。

スポーツを通じた「文明化の使命」は一九一〇年代、アメリカの植民地支配化にあったフィリピンで産声をあげる。第一章の焦点は、アメリカＹＭＣＡのエルウッド・ブラウンとその同僚たちによる極東大会創設のプロセスに当てられる。

結果的にブラウンはフィリピン人、日本人、中国人の支持者を探し出した。スポーツは筋肉的キリスト教の理想に基づいた東アジアの近代化を助けるものになるはずだった。確かに極東大会は後のアジア大会と比べれば、スポーツとアマチュアの価値観を普及することを主眼にした低コストの大会を実現した。従って、嘉納治五郎などが部分的な抵抗を示したものの、初期の極東大会はブラウンが意図していたような形で開催されていた。それは同時にまだアジア人によるスポーツ大会の開催という理想が、それほど多くのアジア人指導者たちに共有されていなかったことを示している。しかし、一九二〇年代頃からアジア人の、アジア人による、アジア人のための大会への欲求は次第に高まりを見せていく。

第二章は、一九二〇年代から一九三〇年代の極東大会と西アジア大会について、大会のアジア化という視点から論じられる。アジア化のプロセスは中国、日本、フィリピンの三つの国の国民化のプロセスから成っている。スポーツによる近代化――平等主義的で国際主義的で経済的に発展する市民訓練としてアマチュアスポーツを推進すること――については、いずれの国でも受け入れられた。だが、どの国でも程度は異なれ、西洋の植民地主義と家父長的態度に対して、スポーツの自治を求めて戦うという文脈を共有していた。ここにおいて、スポーツによる近代化は「民族の覚醒」や「アジアの覚醒」として提示され、アジアの文化や宗教的要素が大会を象徴するようにもなった。

しかし、興味深いのは、オリンピックとの共存であった。西洋に端を発するオリンピズムは筋肉的キリスト教とは対照的に、現存するどんな宗教とも直接的関係を持たず、それゆえ潜在的に高い統合作用を有すると解釈された。開催国は、アジア化の過程で民族文化的要素とオリンピック的要素を組み合わせるという方法でスポーツ大会を奪用していった。

第三章では、インドで開かれた第一回アジア大会（一九五一年）が取り上げられる。すでに合計一〇回の極東大会を開催していた東アジア地域に対して、インドを含む南アジア及び西アジア地域は西アジア大会を一度開催することができただけであった。第二次世界大戦後のアジアの再編成過程において、インドの初代首相ジャワハルラール・ネルーは、自国をその中心的指導者に位置付けようとしていた。一方、アジア競技連盟の設立に具体的な役割を果たしたのはグル・ダット・ソンディであった。

結果的に第一回大会には、アジアの一一カ国が参加した（これに加えて中華人民共和国がアジア競技連盟のメンバーである「中国」の代表としてオブザーバー参加）。汎アジアというアジアの地理的な統合（極東大会と西アジア大会の統合）を目指したこの大会は、その規模において、最早アマチュアスポーツの振興による市民訓練の舞台という初期の性格を維持し続けることが難しいことを示唆しているようだった。結局、アジア競技連盟の創設と第一回アジア大会の開催もまた極東大会と同様に、国家的、アジア的「再生」として描かれた。

第四章は、第二回アジア大会（一九五四年）とその開催国であるフィリピン、そして冷戦化という新たな時代状況の中でのこの大会の位置付けが議論される。すでに多くの国際スポーツ大会の開催経験を有するフィリピンにとっても、植民地主義から脱却した新生フィリピンをアジア諸国に印象付ける重要な大会であった。

アジア競技連盟への加盟国は第一回アジア大会の一二から二〇へと増えていた。注目すべきはそれら新規加盟国の全てがアメリカの同盟国や植民地だったことである。中華民国、韓国、南ベトナム、イスラエルが第二回大会に参加する一方、これらの国に敵対するような共産主義政府は参加しようとしなかった。それでも依然として大会をめぐる言説はアジアの団結と平和にあった。今やそこに民主主義が加わり、その後二〇年にわたり、アジア大会を「自由世界」と「共産主義圏」の対立の象徴とした。開催国フィリピンはそうした中で自らを自由な世界に属する「自由国家」として描いた。大会の演出では、特に開会式でフィリピンの民族舞踊が披露されるなど、国際主義的な側面ばかりではなく、国家

ナショナリズム的側面も示された。そして、汎アジア主義的な側面はあまり見られなかった。

第五章では、東京で行われた第三回アジア大会（一九五八年）が扱われる。東京大学教授、ＩＯＣ委員、日本体育協会会長などであった東龍太郎が、この時にアジア競技連盟会長になった。前回大会もそうであったが、この大会の主催者の中心を占めたのも政府と密接な関係を持つ者たちであった。日本にとってはこの大会を成功させることが先の戦争からの再生を、文化と経済の両面において日本国民や諸外国に印象付けることになる。日本と世界はこの第三回大会で、日本が一九六四年に迎える非西洋圏での初めてのオリンピック開催を成功させる能力があることを確認しようとしていた。

結果的にこの大会は世界各国のスポーツ役員に対して、日本はスポーツの国際大会を主催する最良の国の一つであるとの印象を与え、前回のオリンピック大会を超えたとも言われた。しかし、一方でアジア大会がますますネイションのブランド化の舞台となったことを示していた。観衆を教育し、市民訓練としてのアマチュアスポーツに取り組ませるという初期の目標は後景化していく。結局、日本はアジアの中でも際立って発展した国であるとの印象を各国に与えることになり、以後、アジア大会は一段と主催国の発展の度合いを示すような場となっていく。

第六章は、インドネシアで行われた第四回アジア大会（一九六二年）が取り上げられる。大会はスカルノ政権下における反西洋の立場を少なからず反映したものとなる一方、政府による大規模な近代化と発展のプロジェクトを示す展示場のような性格を強めたものともなった。スカルノによる反西洋的国際主義はアジア競技連盟内部での地域形態の調整を目指したが、ソンディらの介入もあり、実現することはなかった。しかし、その論理的帰結として、「新興国競技大会」という興味深い別の国際スポーツ大会を生み出すことにもなった。

大会の演出は第三回大会に続き、さらにネイションのブランド化という方向性を目指すものとなっていった。スカルノは国内の異なる民族同士が団結してこの大会を成功させることを求めた。そして、異なる政治的イデオロギーを有しつつも、西洋や共産主義圏と同程度の施設やインフラを持ち、急速に発展しつつある近代国家としてのインドネシアを宣伝することが意図された。第四回大会は「国家主義的再生」の考えを始めとする極めて強力な国家ナショナリズムと反西洋的国際主義によって特徴づけられるが、一方で、インドを始めとする様々な国のスポーツ役員、ジャーナリストらはこの大会が優れて組織的に運営されたと評価した。

第七章ではタイで連続して開催されたアジア大会第五回、六回大会（一九六六年と一九七〇年）が扱われた。第六回大会は開催を断念した韓国の代わりにタイが開催した。第五回大会は高度近代主義の権威主義版という性格を備えた大会と位置づけられている。大会の開催と成功は時の軍事政権、王政を支持し、共産主義の宣伝を阻止した。二つの大会はサリットとタノームの政権下に行われ、両大会の総裁にはプミポン国王がついた。反共産主義という視点から言えば、タイはすでに東南アジア半島競技大会（ＳＥＡＰ）を一九五九年に開催しており、これはアメリカも関わる東南アジアの反共地域建設計画のひとつともされている。国際的

なスポーツ大会の開催という意味で、タイはＳＥＡＰ大会の経験を存分に活かしたといえた。

そして、明らかにこの二回の大会はサリットとタノームによる開発主義政権の国家的事業の一つとして開催されたといえる。一方でかつてのピブーン政権が排除しようとしていた王制の復活を印象づける舞台でもあった。そして、汎アジア主義という観点から言えば、前回のインドネシア大会と対照的に、最初から共産主義圏の国を排除したアジアの大会となった。結果的に二つの大会を通じて、タイにおける国際スポーツの発展と大会の主催者としての十分な能力を国際社会に印象付けることになった。

第八章は、イランで開催された第七回アジア大会（一九七四年）が扱われる。西アジアでの初めての開催は多くのアラブ諸国の参加を促し、アジア競技連盟の地域形態、そして東アジアと西アジアにおける権力関係に重大な変化を及ぼした。中国との関係を重視するイランの望みによって、再び大会は反西洋、反植民地主義的色彩を帯びるかに見えたが、結果的に一九六二年のインドネシアを超えるほどのものにはならなかった。

とはいえ、この大会を最初の真のアジア大会であったと考える人々もいる。アラブ諸国に加えて、ここには中国や北朝鮮も参加した。冷戦イデオロギーの点で、イランは主催者として新興国競技大会とアジア大会というアジアの部分的分裂を克服したかに見える。

他方で、大会の開催を通じて、先進国に追いつき世界の指導的国家を目指すイランにより、アマチュアの規範と価値観による教育という側面は消し去られていた。ソンディなどが最後まで抵抗を示したが、アジア大会は次第に筋肉的キリスト教やオリンピズムに則った市民訓練の場から、それぞれの開催国の発展を誇示する権威主義的な支配者らによる政治的パフォーマンスの舞台となっていた。

終章では改めて、本書の成果が（一）大会の主催者、（二）ナショナリズムと汎アジア主義、（三）近代化、発展、ネイションのブランド化という側面から整理される。本論と終章を踏まえて、本書の成果を思い切って図式化すれば、次のようになるだろう。

極東大会から西アジア大会を経て、アジア大会に至るその過程において、まずＹＭＣＡによるキリスト教的な市民訓練としてのスポーツ大会は、より世俗化したオリンピズムを介して奪用され、アジア人によるアジア人の文明化の手段となった。その後は、ネイションの建設と汎アジア構想の根幹をなす国際主義が緊張関係を持ちながら、スポーツ大会の様相を徐々に変えていく。第三回アジア大会を節目に国家ナショナリズムや民族主義の色調がとりわけ大会の演出面で顕著になり、やがては権威主義的あるいは半権威主義的開催者らによってより明確にアジア大会は国家の発展を示し、国家のブランド化を成し遂げるための舞台となっていった。著者が最後に述べるように、エルウッド・ブラウンはこれを前向きな結果とは思わなかったかも知れないが、スポーツを通じた文明化の使命はもはや次の段階――プロフェッショナリズムと商業主義――に取って代わられている。このような文明化の使命――それもまた評者は疑わしく思うが――の終焉を経た今日、大衆的スペクタクル以上の肯定的な見通しを国際スポーツ大会のどんな側面に見出すことができるのか。冒頭に記した評者の懸念は

ここに由来する。

改めていうまでもなく「近代」という時代区分に対する研究者の認識はそれぞれ微妙に異なるだろう。だが、ひとまず一九世紀中頃のイギリスを「近代スポーツ」の起点とする見解は多くのスポーツ研究者らの間で共有されている。本書の用語に引きつければ、「アマチュアスポーツ」と呼ばれる運動競技である。そして今日、単に「スポーツ」と言えば、そのようなイギリス発祥の近代スポーツを指す場合が少なくない。評者が専門とするスポーツ人類学は、そうした近代スポーツを非近代的とみなされる身体運動との関連において相対化し、人類文化としてのスポーツ・身体運動の多様性を問題にしてきた[4]。このような立場から、本書の筋立てを（近代）スポーツというコンタクトゾーンに生じた東洋と西洋の身体運動をめぐるヘゲモニー争いとして読んでみる。そうしてみれば、本書が明示的に語ることのなかった別の重要なテーマが見えてくる。それは、近代という時代に「スポーツ」概念それ自体が東洋においていかに受容され同時にまた奪用されたのかという問題である。本書では、そうしたスポーツそのものを問うような議論は（おそらく）意図的に取り除かれているが、評者のようなスポーツ人類学を専門とする人間には、やはり興味深い点である。

例えば、『帝国日本とスポーツ』において高嶋航は帝国日本の末期においては、結果としてスポーツは不在だったと主張する。だがその不在へと至る過程において、日本国内では何をスポーツとするかをめぐる、政治家や体育関係者らの間での様々な葛藤や対立があった。西洋との関係だけでなく近隣のアジア諸国との関係性が目まぐるしく変化する近代の日本において、スポーツは時に武術や体操と重なり、時には明確に区別された。武術という伝統的な身体文化はスポーツというコンタクトゾーンにおいて相対化され、その存在が改めて問われることになった[5]。

本書はまさにその題名の通り、スポーツの汎アジア的展開と近代アジアの誕生の密接な関係を明らかにするが、一方でアジア諸国の人々が「近代スポーツ」を受容し、奪用し、内面化させていく過程で生じる経験の諸相についての記述にはやや不満も残る。スポーツというコンタクトゾーンで能動性を発揮するＹＭＣＡや一部の政治エリートたちに対して、近代的市民たれと教育される一般の人々はスポーツとスポーツ大会をいかに経験し、そして、その経験を以ってしてその後をどう生きたのか。伝統的な身体運動の担い手らは「近代スポーツ」という他者に対してどのように応答したのだろうか。本書はスポーツによる近代化というグローバルな問題をアジア諸国それぞれの文脈に即してナショナルな次元で検討した。しかし加えてここにさらにローカルな視点からの記述があればどうなっただろうか。読み進めていく中で、評者はそのような無い物ねだりを感じてしまった。

しかし、それはもちろん本書の瑕疵というわけではない。スポーツのグローバルヒストリーという本書の企てを考えれば、仕方のないことである。むしろ、そのような課題は評者のようなスポーツ研究者らが引き受けるべきものである。二〇二〇年の東京で我々は何を経験するのか。あるいは何を経験すべきなのか。何れにしても、本書が今後、アジア・スポーツ史研究における最重要文献となり、必読書となるのは間違いないだろう。本書をもっ

て、ようやく〝アジア・スポーツ史〟がここから始まるとも言えるのではないだろうか。

最後に、紙幅の関係上、本書が取り上げている数多くの興味深い人物や開催国ごとの個別の出来事については十分に触れることができなかった。そうした内容に興味のある読者はぜひ本書を実際に取ってみて欲しい。今後様々に展開可能な研究の種がそこに見つかるはずである。

① この前身の大会に当たる東南アジア半島大会（SEAP Games）の設立経緯が本書第七章で扱われている。

② 正式名称は、第三二回オリンピック競技大会（Games of the XXXII Olympiad）と東京二〇二〇パラリンピック競技大会（Tokyo 2020 Paralympic Games）である。

③ 著書だけをざっと挙げてみても、本書の翻訳者である高嶋航の『帝国日本とスポーツ』（塙書房、二〇一二）、Fan Hong の編著による *Sport, Nationalism and Orientalism: The Asian Games* (Routledge, 2007)、そして Simon Creak の *Embodied Nation: Sport, Masculinity, and the Making of Modern Laos* (University of Hawaii Press, 2015) などがある。

④ 英語の「スポーツ sport」が専ら運動競技を指すことになるのは一九世紀後半以降とされる。スポーツ人類学では、スポーツの語源であるラテン語の「deportare＝気分を変える／娯楽」が意味するところに基づき、分析概念としての「スポーツ」の範囲をダンス、武術、遊びなども含む最広義の意味において用いる。

⑤ 例えば中嶋哲也は、近代日本における武道のスポーツ化言説を問題にし、スポーツと武道に生じた様々な対立や葛藤、そして変容を見事に描き出している。それは日本における武道の成立過程を詳細に後付けるものであったと同時にスポーツの受容過程を浮き彫りにするものであったと言える。中嶋哲也『近代日本の武道論：〈武道のスポーツ化〉問題の誕生』（国書刊行会、二〇一七）。

（B6判　五一二頁　二〇一七年一一月　一色出版　六〇〇〇円＋税）

（早稲田大学スポーツ科学学術院講師）